

# 幕政の手綱を

# 握った老中、

# 間部詮勝



間部詮勝肖像  
(鯖江市まなべの館蔵)

**鯖** 江藩の第7代藩主であり、現在の西山公園を拓いた間部詮勝。詮勝は幕政にも深く関与しており、激動の時代の中核にいた人物です。

文化元(1804)年、鯖江藩5代藩主、間部詮熙の3男として誕生した詮勝は、文政6(1823)年に浜田藩主、松平康任の娘と結婚します。康任が老中に昇進すると、詮勝は奏者番(城中の礼式を管理する役職)に抜擢され、のちに寺社奉行・大坂城代・京都所司代と昇進を重ねました。京都所司代在職中には、辻

ごとに町名と通名を記した札をぶら下げて交通の利便性を向上させたほか、市中に便所を設けて衛生状態を改善するなど人々の生活に貢献しました。

天保11(1840)年、詮勝は、徳川家斉付の西丸老中に就任します。時の老中首座水野忠邦は、傾いた幕府財政を再建しようと天保の改革を断行しますが、大名から百姓に至るまでこれに反発。詮勝も改革に対して批判的で忠邦と対立し、藤岡屋由蔵の「藤岡屋日記」には「幕府政治に直接かわる役柄ではない詮勝が忠邦の不正や失策を内偵させて

いる」といううわさが書かれるほどでした。天保14(1843)年、忠邦は強権的な政治手法を非難されて老中を罷免、詮勝もまた病を理由に西丸老中を辞職し、両雄の対立は終結しました。

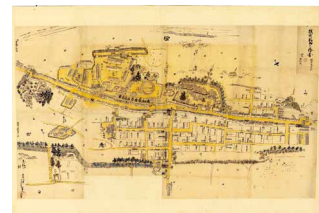
雌伏の時を過ごした詮勝が再び雄飛したのは15年後の安政5(1858)年です。大老井伊直弼の命で老中に再登用された詮勝は、「勝手掛兼外国御用掛」に任ぜられ、天皇の許可なく結ばれた日米修好通商条約の事後承諾を得る任務に当たります。この時、將軍継嗣問題も複雑に絡み合い、幕府を批判する勢力の声は激しさを増していったため、直弼は「安政の大獄」を断行しました。詮勝も「天下分け目のご奉公」と決死の覚悟で上洛し、勅許獲得に奔走しましたが、逮捕者に対する量刑や勅許の諸条件(天皇は国力が充実した後に鎖国の状態に戻すことを求めていた)をめぐる直弼と対立。翌年末に詮勝は老中を免職になり、直弼も安政7(1860)年3月に桜田門外で襲撃を受けて命を落とし、直弼と詮勝が主導した安政期の政権は瓦解しました。

詮勝はその後政治の表舞台に立つことはありませんでした。激動の時

代の中心にいた詮勝は、晩年は静かな暮らしの中で書画や詩歌の製作に精を出し、明治17(1884)年にその生涯を終えました。



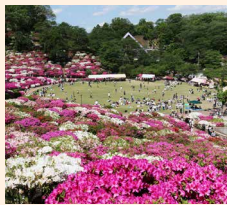
伝間部詮勝所用  
金黄櫛句絨具足  
(鯖江市まなべの館蔵)



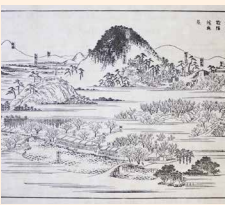
越前鯖江之絵図  
(個人蔵)

## 関連史料・ゆかりの地

### 詮勝が拓いた 憩いの庭、西山公園



西山公園



歌川広重

「越前鯖江瀨陽溪真景」

安政3(1856)年に間部詮勝が「与衆道楽」の理念で拓いた瀨陽溪。後に北陸随一のツツジの名所西山公園となりました。開園以前は焰硝蔵が設置されており、詮勝の西の丸老中就任時には鯖江城の築城も計画されました。

【住所】鯖江市桜町3丁目(福井鉄道西山公園駅から徒歩3分)

参考資料等

内田寛『間部閣老』、鯖江市教育委員会文化課編『間部詮勝と幕末維新の軌跡』  
鯖江市教育委員会文化課編『安政の大獄の真実-幕末史における再評価-』

執筆・協力

鯖江市教育委員会文化課